

新たな特産野菜産地の育成

1 はじめに

氷上郡は、丹波ナス、丹波大納言小豆等数多くの特産物があり、各町でその生産振興が進められている伝統ある産地である。しかし栽培者の高齢化や機械化が困難等から産地規模が縮小傾向である。そこで丹波に合った新規作物の導入により農地の有効利用、収益の拡大による産地の活性化とその振興を進めている。その結果、表のように丹波ひかみねぎ（下仁田系ねぎ）に代表される新規作物の作付け面積が年々増加した。

2 新規導入作物の検討

氷上郡においても過去様々な新規作物が導入され産地形成が試みられたが、定着したものは少ない。今回の新規作物の導入にあたってはその失敗を繰り返すことがないように、特に品目については、次のことに留意し選定した。①比較的栽培が容易で、女性、熟年者が栽培可能である。②高収益でなくとも、米販売代金程度が確保できること。③比較的馴染みのある作物であること。

その結果1993年に丹波ひかみねぎ、黒大豆早生枝豆、1996年にはソラマメを導入した。

3 なぜ、ソラマメを！

ソラマメの歴史を探索すると、736年（天平8年）、インドの僧侶で菩提仙那が来朝した際に行基上人に一袋の種子を与え、それが摂津国武庫村（現尼崎市）で栽培が始まったとされている。その後「武庫一寸」として栽培され1933～1935年の全盛期には種子用子実として8,000～9,000畝が各地に出荷された。しかし現在では産地としては残っていない。また氷上郡においても戦前までは栽培が盛んであったがほとんど姿を消している。こうした馴染みのあるソラマメは、県内や近郊には産地がないこと、産地復活と各特産物の前後作物とし

て作付けが可能、また比較的労力がかからず、冬場の収入源となることに着目し選定した。

4 栽培推進は農家を選ぶ

新規作物の栽培を推進し、地域に定着させるためには、まず初年度の成否が大きなポイントである。そこで最初の栽培農家は、技術と人望のある人を選定し栽培を始めた。また栽培を続ける中で、収量の増加と品質の向上のため技術的には、播種期、播種方法、定植期、摘心時期、整枝方法等の検討と改善を重ね、氷上版栽培ごよみを作成した。そして農協とともに新規特産野菜として郡内の各町農家に広く栽培推進、講習会を開催した結果、労力もかからないうえ価格も良いことから、面積も順調に伸びている。

5 今後の課題

1993年から新規作物による特産化に取り組み丹波ひかみねぎは、1999年には販売金額4,800万円、早生黒大豆枝豆6,000万円、1996年からのソラマメは2,500万円と着実に伸長してきた。今後はより一層の面積の拡大と販売方法の検討により丹波の特産物の名声を高めていきたい。

小田芳三（柏原普及センター）



図 ソラマメの栽培状況

表 新規特産物の栽培面積推移

年 度	1993年	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年
ソ ラ マ メ	—	—	—	0.8	1.9	3.2	4.1
丹波ひかみねぎ	0.5	0.7	0.8	2.6	2.8	7.8	10.4
早生黒大豆	1.2	2.3	4.7	8.1	11.2	16.5	23.1

(ha)

ひょうごの農業技術 No.113

平成13年1月1日（隔月刊）

1部250円（申込先・県立中央農業技術センター）

兵庫県立中央農業技術センター（0790）47-1117

兵庫県立北部農業技術センター（0796）74-1230

兵庫県立淡路農業技術センター（0799）42-4880